

# Die Eiche

ディ アイヘ

<http://www.jdg-chiba.com>



Japanisch-Deutsche  
Gesellschaft der Präfektur  
Chiba

〒270-2214 松戸市松飛台556-12  
Tel./Fax: 047-385-1456

Mail: info@jdg-chiba.com



協会Home Page

## 千葉県日独協会の今後に 期待すること

### —誌面会員へのヒアリング—

当協会は、2021年設立25周年を迎えましたが、その後、コロナの感染による活動の影響を受け、オンラインを中心にした協会活動を実施してきました。

この間、直接お話しする機会を設けることができず、直接、会員の皆様より協会への活動についてご意見をお伺いすることができませんでした。今回、会員の皆様より、要望、意見、アイデアをいただく機会を作りたいと思いに至りました。このDie Eicheの誌面においても次号以降、会員にお声がけをさせていただければと思っております。その際にご協力の程、何卒、よろしくお願ひいたします。今後の運営委員会における検討にて貴重なご意見として参考にさせていただきます。

今回は、前運営委員とDie Eiche編集長を務められ、現在理事でおられる田中理事と青壮年部にて活動推進くださる保坂会員にヒアリングをさせていただきました（運営委員：勝見 浩明）

### ■田中 正延理事からの期待

この4年ほど、私たちは新型コロナウイルスの災禍に悩まされてきました。当協会の活動も大きな制約を受けています。

「協会への期待」。イベントの復活と開催です。提案を一つ。協会創立30周年を迎える2026年へ、少し腰を据えた記念事業を考えたらいかがでしょうか。2005年の「ドイツに親しむ3日間」が一つのイメージです。

モーツァルトやシーボルトの生誕270、230年。日普修好条約締結165年など対外的な連携を求める格好の歴史的なテーマも沢山ありそうです。

歴史に学び未来を思いながら「遊び心」も忘れたくないですね。「身の丈の活動を」は平尾浩三先生の教えですが、会員が“少し背伸び”をしてアイデアを出し、青壮年部とベテラン会員が力を合わせる。組織の活性化、関係機関・団体との協力により対外活動の強化にもなるでしょう。コロナ禍の行方は不透明ですが、時間はあります。

二つ目は、HP(ホームページ)の刷新・充実です。デジタル化時代。PCからスマホ、タブレットは私たちの日常のツールです。30周年を機に、Die EicheとHPを一本化(会員専用サイトも用意)して、協会の新しい『顔』にする。広報の武器として、インパクトと効果は大きいと思います。

### ■保坂 有里奈会員からの期待

当協会の今後に向けて、青壮年部の一員として、以下2点について考えてみました。

●幅広い年齢層の会員を増やし、異なる世代が交流できる場所づくり:

当協会が様々な年齢層の会員を引き寄せ、異なる世代が交流できる場を提供することに期待しています。このような環境では、経験とアイデアの共有が活発に行われ、組織全体も活気づくのではないかと考えます。交流の場として、先日開催されたビール祭りのようなカジュアルな場から、会員独自の専門知識、経験や趣味を活かした



ワークショップなどが挙げられます。当協会には駐在経験のある方が多くいらっしゃると思いますが、例えば、そのような経験の共有も特に若手メンバーにとって興味深いでしょう。

● 対外組織との交流や連携の強化:

当協会が、個別のイベント開催だけでなく、ドイツ大使館、ドイツ関連機関、他県の日独協会などとの交流や連携を一層強化することを期待しています。これにより、日独交流が更に活性化し、会員にとってもドイツ語を使用する機会やネットワーク構築の機会が増えるでしょう。

上記の期待を抱きながら、私自身も一会員として、できる限り組織の活性化に向けて関与して参りたいと思います。

## 習志野が原命名150周年記念

小林 多美子会員

現在の船橋市、習志野市、八千代市にまたがる一帯はかつて、「習志野原」と呼ばれ、旧陸軍の演習場でした。今年2023年で、習志野原という地名が1873(明治6)年に命名されて150年を迎えました。習志野原の始まりはこの年の4月、当時の大和田原で明治天皇が臨席して近衛兵の大演習が行われたことを契機とします。大和田原は、江戸時代までは幕府が軍馬とするための野馬を放牧していた「小金牧」が置かれていました。

軍の演習場としての役割を終えた終戦後、習志野原は復員軍人や戦災者、海外引き揚げ者らによって農地開拓がされます。旧陸軍関連については地域に記念碑などの史跡が残されていますが、戦後の一時期に習志野原に刻まれた開拓の歴史は、その痕跡を伝えるものはほとんどありません。

当時は深刻な食糧不足の時代。終戦の8月15日から1ヵ月足らずの9月11日には、くわ入れ式が行われています。軍馬や戦車などが踏み固めた土地はやせていて固く、土を掘り起こすだけでも一苦労だったそうです。まさに土にまみれての戦後のスタートでした。



明治天皇駐蹕之處の碑

開拓地は第一～九区に分けられ、それぞれ名前がつけられたといわれています。そのうち第八区が「御幸(みゆき)」でした。ここには習志野原命名の由来となった明治天皇が演習に臨席した場所と伝わり、それを記念する「明治天皇駐蹕之處の碑」が最初に建てられた場所があったためです。現在は町会の「みゆき町会館」が建っています。碑は「御幸台」と呼ばれていました。御幸は天皇が外出することを指し、「行幸」ともいいます。近くの薬円台小学校の校歌では「御幸台からのぼる日の 朝のひかりをまず受けて」と歌われています。地域のシンボリック存在でしたが、御幸は地名としては残らず、現在は地元の町会名がその名残を伝えています。

戦前は陸軍墓地であり、ドイツ兵捕虜の慰霊碑が建つ習志野霊園も、戦後は開拓者たちの墓地として使用されました。木製の十字架が建つだけなど荒れ放題だったというドイツ兵とロシア兵捕虜の墓に慰霊碑を整備するために尽力された石崎申之さんも、開拓者のひとりでした。石崎さんは陸軍習志野学校の元教官だったといえます。石崎家のお墓も習志野霊園の一角にあり、そこには明治天皇の御製「夏草も 茂らざりけり もののふの 道おこたらず ならしの原」が刻まれた句碑も建てられています。



## “O alte Burschenherrlichkeit!” 「我が懐かしき青春の日々よ！」

～ドイツ語文化圏に存在するStudentenverbindung（学生組合）～

- 常任理事兼事務局長 植松 健 -

ドイツ留学経験がある方は、実際“Studentenverbindung”の活動そのものを見たことはなくても、その名前だけなら一度は耳にしたことがあるかもしれません。

Studentenverbindung（学生組合）とは、ナポレオン戦争後のメッテルニヒ体制に危機感を抱いた進歩的學生が、全ドイツの自由と統一を願って各大学に組織した団体に由来するもので、今でもドイツ国内にはその流れをくむ様々な学生組合がおよそ1,000団体、全部で約15万人の会員（ドイツの男子学生全体の約15%）がなんらかのVerbindungに所属して活動を行なっているとされています。

その起源は遠く中世ヨーロッパまで遡り、もともとは当時の大学都市における地方からの学生の「同郷学生会

（Landsmannschaft）」的だったものが、19世紀半ば（3月革命頃）までに、現在のいわゆる「Studentenverbindung」と呼ばれる組織となりました。学生組合に所属する正会員は“Bursche”と呼ばれていますが、これはもともと学生組合の寮に住む學生が“burusarii”と呼ばれていたことに由来します。従って“Burschenherrlichkeit”は「（正会員として過ごした）すばらしい青春時代」となります。

主な会員には、元ローマ教皇ベネディクト16世や白柳誠一元枢機卿はじめ、クラウス元オーストリア首相、メルツCDU党首、リュブケ元独大統領、古くはゲーテ、シューマン、ワーグナー、フルトヴェングラー、マルクスやビスマルク、ニーチェやシュトルムなど多くの著名人が挙げられます。

そしてこの長い歴史と伝統を誇るドイツの学生組合ですが、実は60年も前から日本にもあるのです。即ち上智大学を拠点とする日本で唯一のドイツ学生組合、「学士会 江戸ライン会=ERTO」は、CVという「カトリック」で「決闘をしない」ドイツ最大（126団体、会員総数30,000人）の学生組合連合会に属しています。CV傘下の会員間は、初対面から“Duzen”（相手が大統領でもローマ教皇でも！）となります。

ERTOには奨学金制度も存在し、現在も多くの会員が世界中で、ドイツやオーストリアの大学留学時代に培った「学生組合ネットワーク」を活かして活躍しています。私も1977年に入会後当会の奨学金制度を使ってミュンスター大学に留学しました。そして2003年から20年間の先輩団総裁としての任務を終え、節目の今冬学期より先輩団名誉総裁として、引き続き若き後輩諸君のサポートをしていく予定です。

**O alte Burschenherrlichkeit!**

わが青春に悔いはなし。

お世話になったすべての人に感謝

を込めて、**ergo bibamus!**



写真は、2013年6月のNovesia Bonnの150周年記念式典にて

## ドイツ大使館夏祭りに参加して

- 山本 久瑠実 会員 -

9月18日、ドイツ連邦共和国大使公邸にて夏祭りが開催され、各地の日独協会及び交流協会の会員約五十名及び大使館関係者が一堂に会しました。

まず、フォン・ゲッツェ大使のご挨拶で、ウクライナや台湾問題など地政学的リスクに日々対峙するなか、日独が互いにかげがえのないパートナーであることが強調されました。

また、東原敏昭全国日独協会連合会会長のご挨拶では、変化の時代にあつて、日独の、特に財界・経済界でのつながりが重要である旨が語られました。

いずれのお話でも、日独の政治的・経済的関係を継続的かつ強固にする礎として、ドイツへの関心を持つ若い世代の活躍が期待されており、その趣旨のもと本イベントにて若年会員を中心に招待がなされたとのことでした。

その後、八木前駐独大使の音頭のもと乾杯が唱和され、美味しいお酒とドイツ料理が立食パーティー形式で振舞われました。どの一角でも和気藹々とした会話が途切れず、温かい雰囲気の中で全国の日独協会の皆様と交流することができました。東京の菊池菜穂子様や、蕨・リンデンの洲崎桃花様とお話では、日独協会の様々なあり方に触れ、大使館職員のグロートフーゼン一等書記官と通訳のヴァインシャーマン様による大使館のお仕事についてのお話はとても興味深く拝聴いたしました。

閉会に際しては、袖岡全国日独協会連合会事務局長より、次回は協会運営の根幹を担う各中堅会員も中心にお招きたい旨の展望が示されました。このような貴重な機会をいただきまして、千葉県日独協会会員の皆様には深く御礼申し上げます。ありがとうございました。



ドイツ大使との記念撮影  
(筆者:左側二人目)

## 新入会員紹介（土屋 実穂）

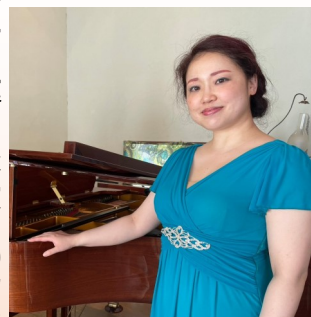
初めまして、土屋実穂です。ベルリンとハンブルクに計5年音楽留学をし、帰国後は千葉県でソプラノ歌手として活動、及び音楽教室・ドイツ語教室の運営をしております。

5月に総会記念講演会で常任理事の土屋有里さん（ピアニスト）と共演させていただき、そのご縁で入会しました。職業柄知り合いが音楽関係に偏りがちなので、多様な方面の方々やドイツという共通点でつながりが持てることを非常にうれしく思っています。

小学校5年生で初めてドイツ語に触れてから（あれは、Fischer-Dieskauの歌う菩提樹でした）発音の美しさ、理路整然とした素晴らしい文法構造！が大好きです。

歌が好きならオペラでしょ？イタリアでしょ？と言われがちですが、ドイツにはバッハやベートーヴェンやブラームスなどなど…素晴らしい作曲家がたくさんいます。

これからも、音楽とドイツ語を通じてみなさまと活動を共にしていけたらと思います。どうぞよろしくお願いたします。





## 第14回日独ユースサミット

### 参加報告

大野 巨児 理事

18歳から30歳までの日独の若者が集まり、文字通り「同じ釜の飯」を食いながら、日独交流の将来について考え、議論し合う1週間。今年8月12日から18日にかけてベルリンで開催された日独ユースサミットへの参加は、かけがえのない体験と素敵な仲間たちとの出会いをもたらしてくれました。

今年で14回目を数える同サミットは「将来の日独交流を担う若者を育て、持続的な日独交流を形成すること」を目的に、毎年その開催地をドイツと日本の間で交互に入れ替えながら30歳までの日独の若者を対象に行われている文化交流プログラムで、ドイツの独日青少年協会と日本の日独ユースネットワークにより企画・運営されています。コロナ禍の影響により2020年からは3度にわたりオンライン形式で開催されていましたが、今年はいよいよその対面式による実施が叶い、自身もこの機会に初めて参加申込みをするに至りました。

今回のサミットで我々参加者は「Krise - 私たちにできること」というテーマの下、現代社会が直面している様々な「危機 = Krise」に対して、今後の社会を担っていく世代である私たちに何ができるか？という問いと向き合いました。日独両国から集まった計40名の参加者は、政治、循環経済、環境、モビリティ、メンタルヘルスという5つのグループに分かれ、それぞれの観点からフィールドワークや調査、ディスカッションを行い、プログラムの最後にはその成果を互いに発表しました。自身が配属された環境グループでは、地球規模の気候変動に起因する「気候危機 (Klimakrise)」をテーマに、環境教育の専門家、環境ジャーナリスト、Fridays For Futureの活動家といった人々から直に話を伺ったりしました。なお最終発表はベルリン日独センターで行われましたが、その際に出席されていたDr. Julia Münchセンター事務総長、元駐日ドイツ大使のDr. Volker Stanzel氏と今後の日独交流のあり方について個人的にお話させていただいたのも良い思い出です。

日中のグループワーク後は、参加者全員でピアガーデンへ出かけたり、カラオケを楽しんだり、宿舎でカードゲームをしながら夜遅くまで語り合ったり...といった時間もあり、毎朝8時の朝食から夜中過ぎの就寝まで、文字通り寝食を共にした仲間たちとは特別な絆が生まれ、最終日の別れは大変な残惜しいものでした。

日独協会での活動も含めこれまで意欲的に日独交流に携わってきた自分にとって、今回の体験は改めてその大切さと楽しさを実感させてくれたものでした。



サミットのポスター



グループワークの様子  
筆者 (左から2番目)



ベルリン日独センターで発表



解散前の集合写真



Julia Münchセンター事務総長との記念撮影

## ドイツの街紹介

北の町LübeckからFlensburg、そしてデンマークの

Odenseまで

2020年10月号(No127)にて、北ドイツの美しい都市ハンブルクを紹介しましたが、今回は、更に北のリューベック、フレンスブルク、そして国境を越えてデンマークのオーデンセの町の思い出です。

コロナパンデミックが起こる1年前の2018年の夏に、北ドイツとデンマーク、他を約18日間かけて車の旅をしました。

ハンブルクから北へ車で1時間、ホルスタイン牛のんびり暮らす広い畑と牧場を横目に1時間ほど走れば、14世紀頃にハンザ都市の一つとして栄えた人口21万のリューベックに着きます。バルト海につながる河川港を持つリューベックの街並みには、ハンザ商人たちが得た利益が積み込まれた遺産が多く残されています。

まずは、15世紀後半に建てられたホルステン門の横を通り市内に入ります。重量感のある黒茶色の門の正面上方にはラテン語で「町の中には協調を、外には平和を」と書かれていて、中世以降からの激動の歴史を包み込んでいるようです。

町の中心には、マルクト広場に面した黒レンガ造りの重厚な市庁舎があり、海産物や塩での交易で栄えた当時の歴史を感じます。近くにマリエン教会やノーベル賞作家のトーマス・マンが頻りに訪れた祖父母の家があります。また、ゴシック様式のマリエン教会の内部も印象的です。

教会は第2次世界大戦で破壊され修復されましたが、破壊され落下した釣鐘が残されていて、当時を思い起こさせます。

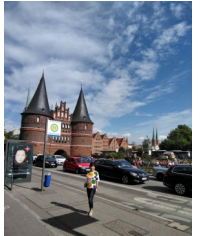
ここから北へ1時間半ほど走れば、デンマークの国境に近いドイツ最北の町、フレンスブルクです。郊外に泊まり、昼に静かな港町を散策しました。あまりの暑さにサングラスを探し回りましたが、鼻の高いドイツ人用が多く、やっと見つけて苦笑いでした。

9カ国に囲まれているドイツの国境の一つを越えてデンマークに入りました。写真の通り国境は止まることなく自由に通過できます。アウトバンの雰囲気も牧歌的風景に変わり、コペンハーゲンに行く前にデンマーク第3の都市のオーデンセに立ち寄りしました。

この町は船橋市と姉妹都市で、アンデルセンの生誕地として知られています。生家の前のお土産屋さんに入って、千葉から来たことを話すと、オー CHIBA、船橋アンデルセン公園に行ったよ、と返事が返ってきたときはとても親近感を覚えました。

デンマークはキャッシュレスの先進国であり、公共駐車場や路上パーキングの精算機にコインもお札も入れるところは無くカード決済で面喰い、また、自転車優先の徹底度にも車の運転者としては困惑しました。

ところで、当協会では過去に6回のドイツ研修旅行を実施しています。現在、ようやく、コロナ



ホルステン門



リューベック市庁舎



Thomas Mannの祖父母の家



リューベックの裏町



フレンスブルクのホテル



フレンスブルクの港



ドイツからデンマークへ



で5年間中断された旅行の復活を目指して実行委員会も動き始めました。条件的には厳しい状況ではありますが、実現できることを願っています。

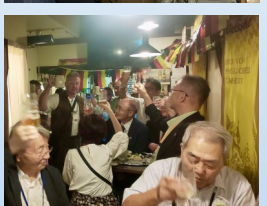
(常任理事: 志賀 久徳)



アンデルセンの生家

放題コースの中、出席者全員が堪能しておりました。

ベルズィック夫妻はとても社交的な方々で、協会員のテーブル全てに立ち寄り、日本語やドイツ語で交流を深めておられ、今後、当協会とドイツ大使館の交流がさらに高まる気配を感じました。来年のこの催しがさらに盛会となることを予感させながら、出席者全員で記念撮影を撮り、約2時間の宴は散会いたしました。



## 青壮年部/日本語/日本文化研究会 オンライン日本語シュタムティッシュ 実施報告

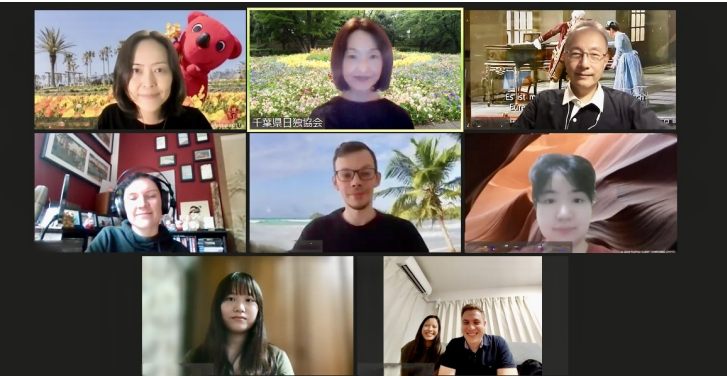
-常任理事 本橋 緑-

9月24日(日)午後6時からオンライン日本語シュタムティッシュが開催されました。日本語を話しながらドイツ語が母語の方との交流を図り、今後の交流の起点にするという勝見青壮年部部長のコンセプトのもとに企画をしました。

テーマは「『私の好きな○○、おすすめの○○』について話しましょう!」。先生は去年7月開催に引き続き、日本語教師の室田真由見理事。参加者はドイツ語話者3名(2名はドイツから参加)、麗澤大学生2名を含む総勢9名でした。

参加者からは様々な「おすすめの○○」があげられました。旧東独時代のレシピ、黒い森のハイキング、日本の電車、日本の食べ物等々。日本語でコミュニケーションをとる中で、お互いの文化が好きで、その言語を学びたい、理解したい、という熱意がたくさん伝わってきて、とても有意義な時間でした。

開催にあたり、多くの方にお声かけ等のご協力をさせていただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。



## 今後の予定

### ■青壮年部-ドイツ歴史研究会-オンライン無料(別途、ご案内)

日時: 10月29日 18:00-19:30

映画で観るドイツ近現代史

東京女子大学・歴史文化専攻教授 柳原先生

12月17日 18:00-19:30

ポーランド、ベルギー、デンマーク国境から見る最近の欧州情勢(仮称)

神戸大学大学院国際文化研究科 衣笠先生(会員)

### ■ドイツ軍人慰霊祭

日時: 11月5日 15:00-17:00

場所: 習志野霊園他(詳細は、別途ご案内致します)

### ■第45回習志野第九合唱団定期演奏会

日時: 12月24日 詳細は、別途ご案内致します

## ビール祭り 4年ぶりのビール祭り盛大に催されました。

ドイツ国内で開催中のオクトーバーフェストに合わせて、9月23日(土)に、会員の交流を深めるため、「ビール祭り懇親会」が船橋駅近くのドイツ・パブ「バイエルン・ストゥーベ」で行われました。今回の集まりには、ドイツ大使館より新任担当武官であるベルズィック大佐および令夫人が初参加された他、22名の協会員が参加しました。



金谷会長の開会挨拶、伊藤光昌氏の「プロースト」という乾杯の音頭で懇親会がスタート。バイリッシュ地方出身のベルズィック夫妻は民族衣装である「ディアンデル」と「レーダーホーゼ」で参加された他、当店の人も同様の衣装で身を包んで対応してくれたため、会場はドイツ国内のビアホールを思わせる雰囲気でありました。宴が進むにつれて、自然発生的に、ドイツ民謡が合唱されるなど、オクトーバーフェストさながらの高揚感漂うムードで懇親会は繰



り広げられました。当店で出されるビールはドイツ産の生ビールで、飲み

## 編集後記

今月号も多くの方に執筆いただき、無事に10月号を発行することができました。ありがとうございます。今月は、冒頭の特集記事として当協会に対するリクエストをヒアリングしました。来月も行いたいと思います。背景として、会員のニーズを把握する、それを組織活動の中でどう実現するか、対応リソースは、活動を推進運営する上での体制は、いかに。組織には寿命があります。常に内なる活性要素が必要です。今回のヒアリングでお寄せくださったご意向を捉えると、内外の人との交流強化が求められている、交流の仕方は、さまざまな手法があります。内部会員との交流促進、そして対外活動への積極推進、さらには、推進するための内部コアコンピタンスとしての知見の強化、これらの各テーマについてニーズと実現計画を中期レンジで構想することも必要な時期に入っていると思います。勝負